[redacted]

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 58　No. 2・3　2006

主幹　佐野 正之

巻頭言

「言葉の力」につながる英語教育を

香川大学教授 ● 竹中 龍範

平成15年に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」が発表され，その目標の一つに「国語力の向上」が掲げられている。一方では相変わらず日本語ブームが続いており，言葉についての関心は決して低くはないように見える。しかし，近年の若者を見ていると，日本語と英語とを問わず，一般にコミュニケーション能力が低下しているのではないだろうかと感ずる。小学校の算数でも，文章題になると問題そのものが理解できない児童が少なくないという。大学においても，人の話を的確に理解し，期待された行動をとるということのできない学生が増えている。

このような状況のなか，次期学習指導要領では，学校の全ての教育内容に必要な基本的な考え方として「言葉の力」を据えることを柱とする，という文部科学省原案が新聞報道によって伝えられた。これは特に国語，英語にのみ限ることではなく，学校教育を挙げて取り組むべきところであるが，やはりその基礎に関わる国語科，英語科の果たす役割は大きい。小学校でも「9歳のカベ」を過ぎ，認知的な理解ができるようになる高学年にあっては，可算名詞としての“language”に加え，不可算名詞たる“language”の働きについて認識できるようになってくる。これを受けて，中学校，高校の英語教育では何ができるのであろうか，また，何をなすべきであろうか。

ゲーテの名言“He who is ignorant of foreign languages knows not his own.”を引くまでもなく，異文化理解をも含めて，英語を学ぶことによって児童・生徒に見えてくるものが何であるかに思いを致してこそ「言葉の力」の基礎を養う英語教育が展開できるのではないだろうか。小学校5年生でも，英語のレシピ中に“1/2 tbsp”を見つけて「何で1から先に書くの？」との発見をする児童が見られるのである。大人がすでに失った発見の能力をいま一度，子どもたちの中に期待し，それを大切に育て上げるところにこそ，自身が英語を学ぶことのおもしろさに魅せられて，その楽しさを子どもとともに享受してきた英語教師の喜びが存するのではなかろうか。

〈19年度新刊 英語Ⅰ〉

Revised Edition ENGLISH NOW Ⅰ

〈基礎・基本に徹した教科書〉

京都産業大学名誉教授　石井 丈夫

Warm-Up

この教科書の特長の一つとして，Lesson 3 以降の各 Lesson の冒頭に **Warm-Up** が設けられています。これは，本文への導入として，日本語で生徒に自由に話させて，本文がどのような内容かを予測させながら，できるだけスムーズに本文につながるように工夫したものです。「正しい答え」がないようなものもいくつかあります。

例えば Lesson 5 の **Warm-Up** では「玄関で靴を脱ぐ」「ファーストフード店が多い」など 8 コマのイラストを見て「日本に来た留学生の多くが驚くことはどれか」を考えさせるようになっています。

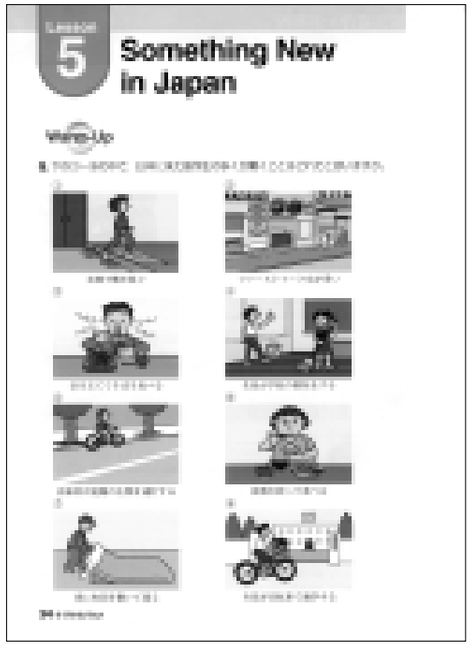
日本に来ている留学生がどの国の出身であるかによって「答え」が異なることでしょう。また，その留学生の出身国の風俗・習慣についての知識がなければ，見当もつかないかもしれません。生徒がそのことに気がつけば，この **Warm-Up** は成功と言ってよいでしょう。

課末(文法のまとめと練習)

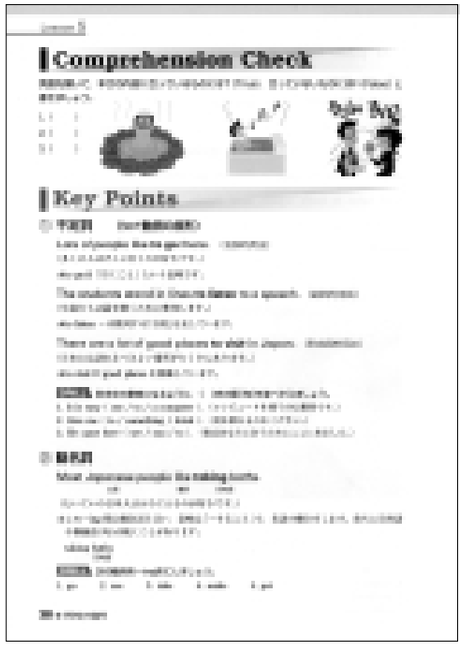
各 Lesson の本文の後ろには **Comprehension Check**, **Key Points**, **Practice**, **Let's Talk! / Challenge!** が設けられています。

Comprehension Check は本文の内容についての英文を聞いて，イラストを見ながら答えるものです。英文はごく短く，簡単な文にしてあります。

Key Points では本文に見られる基本的な 2 つの文法項目について，本文中の英文を示し，必要最小限の説明がなされています。Lesson 7 まではbe 動詞・一般動詞，現在完了など中学校の既習事項の定着をはかっています。**Key Points** の直後には **DRILL** を設けて基本中の基本を確認できるよう配慮してあります。



〈p.34より〉



〈p.38より〉

平成19年度用 開隆堂高校英語教科書・内容のご案内(続)

Practice には設問をA，B，Cと 3 題設けています。Aでは直前の文法事項①について，Bでは文法事項②について，**Key Points** の **DRILL** より少し難しく，しかし基本的な練習ができるようになっています。また，Cはたいていの場合，AとBの混合問題にしてあります。

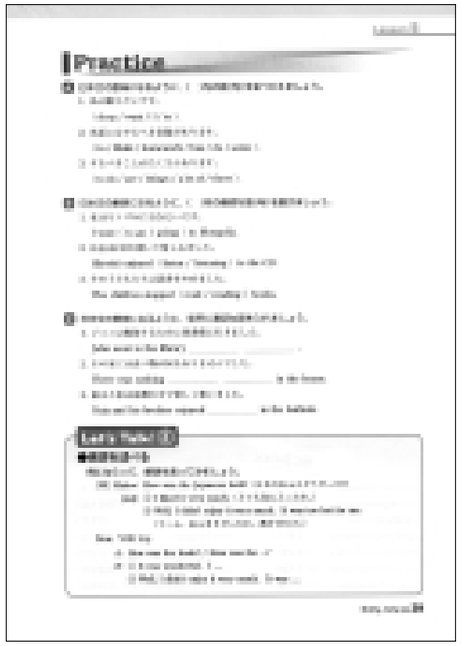
Let's Talk! と**Challenge!** は Lesson によってどちらかが配置されています。**Let's Talk!** は全部で①から⑤まであります。ここでは「感想を述べる」「依頼する」などの表現を身に付けられるよう，短い会話練習をし，覚えるだけでなく，少しは自分を表現できるように考えられています。**Challenge!** には，穴埋めをしながら本文の要約をするものと，「自己紹介」などの自己表現の練習をするものとがあります。

Let's Communicate!

前述した課末の文法のまとめで基礎を固め，いわばその発展として，「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 技能の育成に配慮した，多彩な言語活動が 5 か所に用意されています。

健太がカナダへ留学するという設定で，入国，滞在，家族紹介，スポーツ観戦，旅行などをテーマにしてあります。例として，**Let's Communicate! ②** を見てみます。最初にあるAの **Listening** ではホストブラザーのジムが健太に家族を紹介するという形をとり，イラストを見ながら，英語を聞いて選択させるものです。Bの **Reading** は，ホストマザーの書いたメモを見ながら，健太が郵便局へ行きます。地図を見ながら道順をたどります(**Writing** が入るものもあります)。Cの **Speaking** は全てに入っています。**Let's Communicate! ②** では健太が学校への道順を教えるもので，それを応用した，地図を見て道を教える練習ができるようにしてあります。

Let's Communicate! の最後にある **Pronunciation** ではごく基本的な母音・子音の聞き取りと発音練習ができるようになっています。



〈p.39より〉

〈p.32より〉

題材一覧（B5判・120ページ）

課	タイトル	内容	言語材料
Let's Start ①アルファベット／②発音・基本動詞／③英語の歌(To Love You More)			
1	**Welcome to Japan!**	**初対面のあいさつ：**カナダからやってきた留学生のジュディを，ホストシスターになる日本人高校生みどりが空港で出迎える。	①be動詞 ②一般動詞
2	**I'm Judy Smith.**	**自己紹介・質疑応答：**ジュディが教室で自己紹介をする。出身地トロントや好きなものについて述べた後で，好きな歌手についての質問に答える。	①代名詞 ②助動詞
Let's Communicate! ① 健太，カナダへ			
3	**You Must Try My Cookies.**	**文化の違い・言語：**ジュディは友だちになった理恵の家庭に夕食に招かれる。理恵のお母さんとジュディは，言語文化の相違から生じる理解しづらい場面に遭遇し，戸惑う。	①命令文 ②主語＋動詞(lookなど)＋補語(形容詞)
4	**Different Colors in Different Cultures**	**文化の違い・色：**色に対する文化的相違を日常的な物を通して理解する。例えば，太陽と月の色，虹の色の数，各国のポストの色などである。文化が異なると色のとらえ方が異なる場合があることを理解する。	①wh-疑問文 ②動詞の過去形
Let's Communicate! ② 家族紹介・道案内			
5	**Something New in Japan**	**文化の違い・生活習慣：**アメリカからの留学生スーザン，モンゴルからの留学生バットが日本に来て驚いたことについて発表する。そこから，改めて自国の文化について考えるきっかけとなることを期待する。	①不定詞(名詞的・副詞的・形容詞的用法) ②動名詞
READING ① Whose Wedding?		なかなか結婚に踏み切れずにいる恋人ジョンに対してリンが考えた作戦とは？	復習
6	**Wheelchair Travel in the U.S.A.**	**福祉・旅行：**車いすでも海外旅行はできる。「為せば成る」の精神で，それを証明してみせた痛快な仲間たちのアメリカ旅行記。	①原因・理由を表す不定詞 ②主語＋動詞＋目的語(wh-節)
Let's Communicate! ③ スポーツ観戦			
7	**Sannai Maruyama**	**日本文化・歴史：**日本最大の縄文集落として注目されている青森県の三内丸山遺跡で，ツアーガイドがこの遺跡の偉大さについて説明する。	①比較級・最上級 ②現在完了
8	**Swing Your Arms, Hitomi!**	**スポーツ・女性：**アムステルダム・オリンピック(1928年)の800メートル走で銀メダルを獲得した人見絹枝さんの苦闘のエピソード。	①受け身 ②*過去完了
Let's Communicate! ④ 学校生活			
9	**Garbage, Garbage Everywhere!**	**環境：**深刻な環境問題の一つであるゴミ問題を取り上げ，私たち一人ひとりにできることは何かを考える。	①関係代名詞 ②*主語＋動詞＋目的語＋補語(過去分詞)
10	***Ondol* and *Kimchi***	**隣国の文化：**韓国の文化を代表する「オンドル」と「キムチ」を通して，厳しい冬の寒さをしのぐ韓国の人々の伝統的な生活様式を知る。	①主語＋動詞(keepなど)＋目的語＋補語(形容詞) ②*関係副詞 when
Let's Communicate! ⑤ 病院に行く			
11	**Dreams**	**難民問題・夢：**医師で写真家の山本敏晴さんが現在も戦闘の続くアフガニスタンの難民キャンプで出会った少女ザグネの夢。	①いろいろな接続詞 ②*主語＋動詞(seeなど)＋目的語＋補語(動詞の原形)
READING ② Fly Away Home		**映画『グース』より：**14歳の少女エイミーが偶然森で見つけたグース(カナダガン)の卵をふ化させ，16羽のひなはすくすく育つ。エイミーが母親代わりとなってひなに飛ぶことを教え，越冬させる物語。	復習

＊は高校で初めて学習する言語材料

平成19年度用 開隆堂高校英語教科書・内容のご案内(続)

〈19年度新刊 英語Ⅰ〉

Revised Edition SUNSHINE English Course Ⅰ

〈高度な英語運用能力を養成する教科書〉

岡山大学教授　塚 成信

SUNSHINE English Course I の題材は，学習指導要領が重視する「言語の使用場面」,「言語の働き」,「4技能の有機的統合」などを考慮し，高校生が日常場面において，英語を実際のコミュニケーションの手段として使用する実感が得られるものを選定している。

テキストは，高校生が興味を持って読んでみたい，英語を使ってみたいと思わせるような，オーセンティックで，多様なタイプ(ダイアログ，メール，マニュアル，ナラティブなど)を含めるよう心がけた。今回の改訂で新たに加えた題材のうち，3つについて紹介したい。

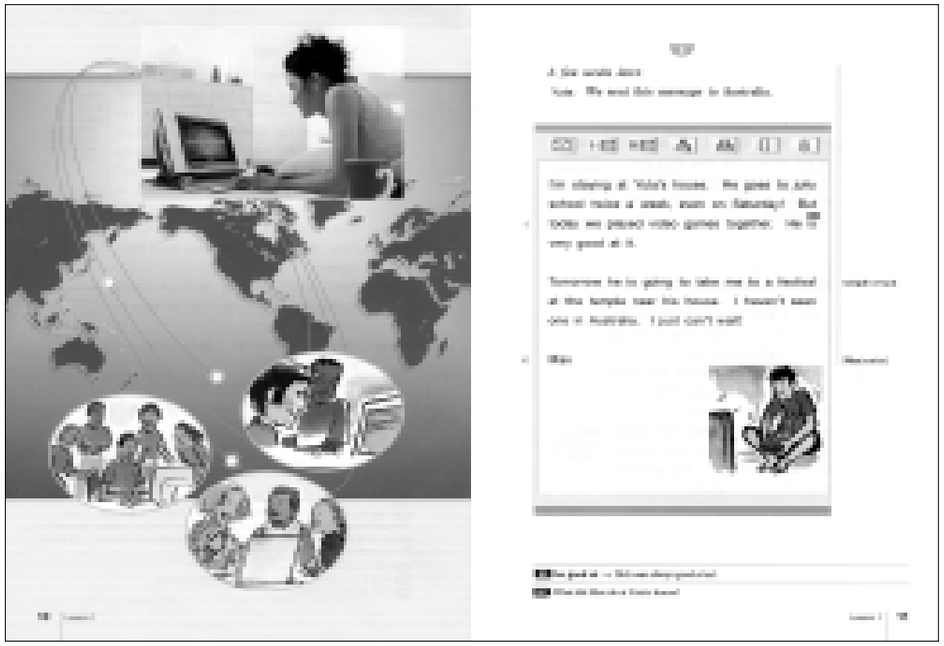
Lesson 1　The Teddy Bear Project

本課で扱っている“The Teddy Bear Project”は，iEARN（The International Education and Resource Network）という NPO 法人が行っている多くの教育プロジェクトの一つである。

このプロジェクトでは，海外の学校とテディベアなどのぬいぐるみを「留学生」として交換し，互いの地域・文化の様子を学習する手立てとする。姉妹校に送られたテディベアは，毎日交代で生徒の家を訪問し，生徒がテディベアに代わって1日の体験を写真などとともに日記に綴って相手校にメールで送る。全ての生徒の家への訪問が終われば，異文化体験をしたテディベアが体験日記とともに送り出した学校に帰ってくる。

もとは小学校低学年を対象にしたものであったが，今では小学校から高校まで幅広い年齢層で実践されている。相手に興味のありそうなことについて，日記の形式で自己文化に関して発信するとともに，相手校から送られてくるメールを読むことを通じて，自分の文化と自分とは異なった文化双方について理解を深めることが期待されている。

(参考：豪州 http://www.iearn.org.au/tbear/，日本 http://www2.jearn.jp/fs/1191/index.htm)



〈pp.10-11より〉

Lesson 6　A Principle for Good Design

この課の題材は，よいデザインのための原則の一つである「近接性」(proximity) を取り上げている。情報をバラバラに配するのではなく，関連のある情報を近くにまとめることによって，見やすく，デザインが引き締まることが述べられている。

学校や部活動の紹介ホームページの作成や，パワーポイントを用いたプレゼンテーションなど，高校生も自分の意図や考えが相手に伝わりやすいデザインについて考える必要性は増えてきたと思われる。

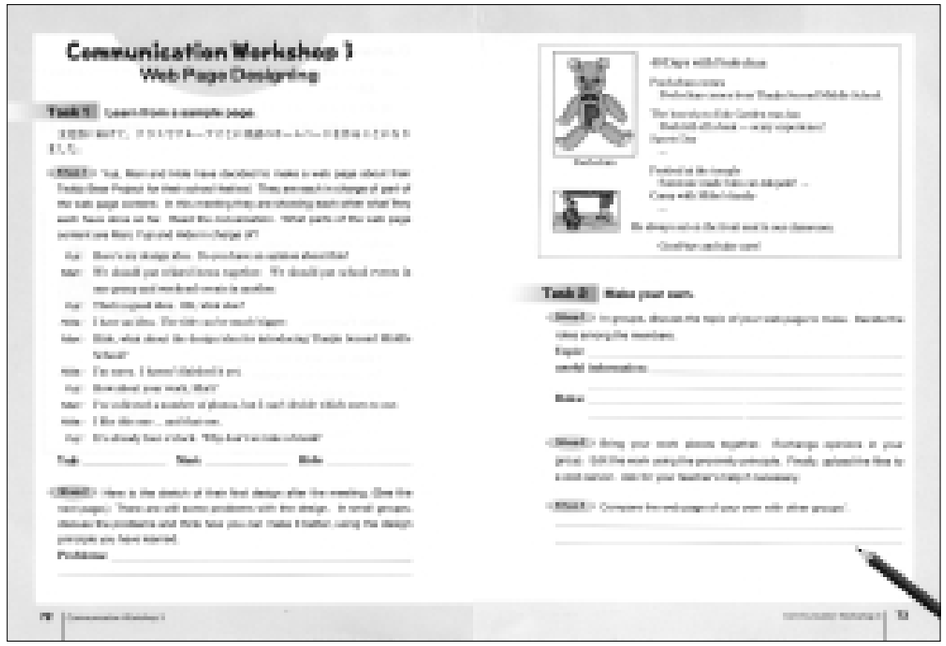
英文マニュアルを読むような気持ちで，楽しく読みながらデザインの在り方について学んでほしい。また，課のすぐ後には，**Communication Workshop 3: Web Page Designing** を配しているので，デザインに気を配りながら，ぜひ実際に学校や地域の活動などを紹介する英語版ホームページを作成してもらいたい。

Lesson 9　The World's Largest Paper Crane

本課の題材は，*Los Angeles Times* という新聞に掲載された実際の記事を再構成したものである。米国ワシントン州シアトル近郊で活躍する日本人女性が取り組み，ギネスブックにも認定された，平和への願いを込めた世界一大きな折り鶴作成の話を中心に，イラク戦争への対応を巡る平和活動家と反戦活動家との相違などへと話題が発展している。

彼女の活動の動機ともなった，広島への原爆投下によって倒れた佐々木禎子さんが，自らの白血病の回復と世界平和を祈りながら千羽鶴を折り続けたが，その願いもむなしく亡くなった話は，ぜひ高校生に読んでもらい，平和への祈りの重要性を再認識してもらいたい部分である。

(参考 http://www.sadako.org/sadakostory.htm)



〈pp.72-73より〉

題材一覧（B5変形判・144ページ）

課	タイトル	内容	言語材料
1	The Teddy Bear Project	ぬいぐるみを介し，e-mailを使って外国の学級との交流を図るテディベアプロジェクトを通して，生徒どうしの国際交流を深めていく。	基本5文型／不定詞の名詞的用法／It is ～ (for ...) to *do* ●気持ちを伝える(喜ぶ，落胆する)
2	Happy Birthday, Mr. Mole	教え子から贈られたメロディー付誕生日カードがきっかけで，モグラ退治に成功したロンドン郊外に住む教師。さて，その意外な方法とは？	不定詞の副詞的用法(目的・原因)，形容詞的用法／関係代名詞(制限用法)／現在完了形 ●考えや意図を伝える(主張する，賛成[反対]する)
Communication Workshop 1 Taking Notes		天気予報，映画案内，留守番電話を題材に，リスニングに焦点を当てた活動。	
3	A Message to Teenagers	新聞の人生相談より。「口うるさい」親から「心配ばかりかける」子どもへの愛情あふれるメッセージ。	S＋V＋O(＝how/whetherなどの節)／S＋V(＝知覚動詞)＋O＋C(原形不定詞/現在分詞)／S＋V＋O＋to *do* ●気持ちを伝える(感謝する，謝る，なぐさめる)
4	Eating with Curiosity	カンガルーの肉を食べることへの日本人とアメリカ人の対応の違い。食文化を通じて，異文化理解を考える。	過去完了形／不定詞の受け身／with ～＋現在分詞など(付帯状況) ●情報を伝える(理由を述べる)
Communication Workshop 2 Show and Tell		「自分の好きなもの」を紹介したり，友だちの発表について質問したりする活動。	
5	Eco-Cars	数種類のエコカーの利点と欠点の紹介。京都議定書を紹介しつつ，環境と車社会との共生を考える。	受け身の進行形／関係代名詞(非制限用法)／関係代名詞what／It is saidなど＋that節 ●相手の行動を促す(指示する，依頼する)
6	A Principle for Good Design	名刺や広告のデザインを通じて，どのようにすれば相手に情報を分かりやすく伝えられるかを考える。	S+V+O+O(=if/whether節)／現在分詞の分詞構文(付帯状況)／seemの用法 ●考えや意図を伝える(推論する，主張する)
Communication Workshop 3 Web Page Designing		文化祭に向けてグループでホームページを作り，発表する創作的な活動。	
7	The Chopsticks Debate	外国人がお箸の使い方を誉められることをどうして嫌がるのか，というトピックを通して，異文化相互理解のあり方を考える。	S+V(＝be動詞)+C(＝that節)／動名詞の受け身／S+V(＝使役動詞)+O+C(＝原形不定詞) ●情報を伝える(説明する，報告する)
8	How to Live Longer and Healthier	健康に長生きをする女性の例を見て，長寿の秘けつを探る。興味深い平均寿命のクイズも紹介。	不定詞の副詞的用法(結果)／仮定法過去 ●気持ちを伝える(ほめる，驚く，うらやむ)
Communication Workshop 4 Interview		関心のあるテーマについて友だちにインタビューし，整理して発表する活動。	
9	The World's Largest Paper Crane	折り鶴を通じて，世界の平和を願い，訴えかける女性について読み，平和への取り組みについて考える。	過去分詞の分詞構文／関係副詞where，when，why，how ●気持ちを伝える(祈る，祝う)
10	An Afghan Athlete Runs Toward Equality	アフガニスタン初の女性アスリートについての記事を読み，平和と女性の権利について考える。	as if ＋仮定法過去／S+V(＝使役動詞)+O+C(＝過去分詞) ●気持ちを伝える(落胆する，苦悩する)
Communication Workshop 5 Discussion		「自動販売機の是非」についてグループで討論し，まとめた意見を発表する活動。	
Reading	Dead Poets Society	型破りな教師が生徒に「今を生きる」ことの大切さを訴えるストーリーを読み，高校生活のあり方について考える。	復習

〈19年度新刊 オーラル・コミュニケーションⅠ〉

ORAL COMMUNICATION
Revised EXPRESSWAYS Ⅰ
Standard Edition
〈中級向け〉

浜松大学教授　**三井 敏正**

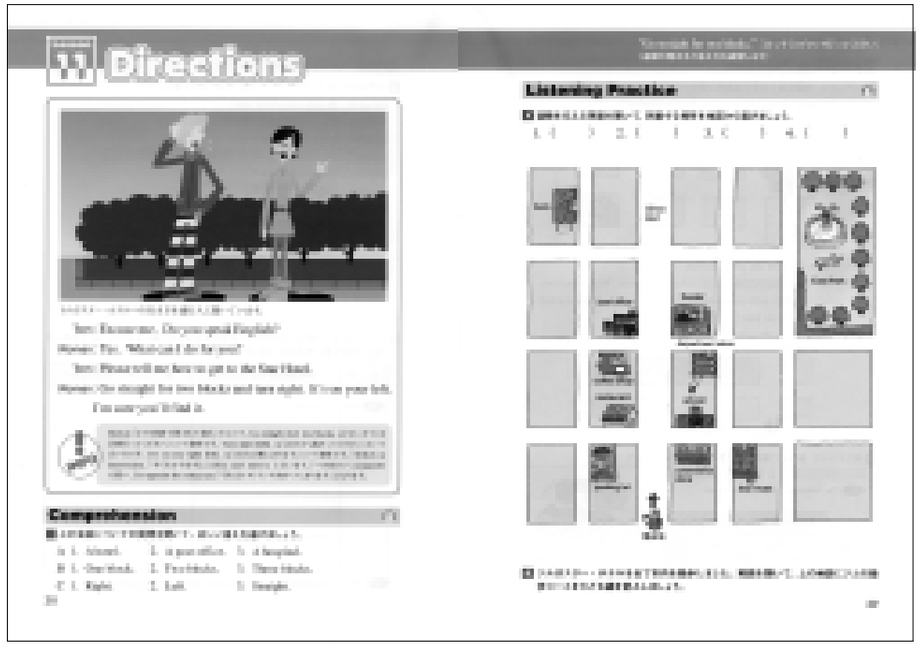
この教科書は中学生レベルの平易な英語で楽しく学習できるように工夫されています。それぞれの Lesson のトピックは日本，それも高校生にとって，自分の生活に密着した場面が多く取り入れられています。生徒の関心と興味が持続するよう，アメリカから日本に留学しているトムと日本人の高校生の亜紀をメインの登場人物として，身近な話題を中心に会話が進みます。トピックは例えば一日のスケジュール，お互いの趣味や好きなスポーツの話，ファースト・フード店や寿司店など，大変ヴァラエティーに富んだものとなっています。

本文の構成はまず，中心的なダイアログから入っています。それぞれの Lesson のダイアログには，核となる重要表現があり，その重要表現を中心として練習しやすく，覚えやすいように分量は４～５行と抑えてあります。例えば，Lesson 11 の“Directions”の本文は次のようになっています。

Tom: Excuse me. Do you speak English?
Woman: Yes, what can I do for you?
Tom: Please tell me how to get to the Star Hotel.
Woman: Go straight for two blocks and turn right. It's on your left. I'm sure you'll find it.

このように道順のたずね方と答え方の基本表現をまず学びます。

ダイアログの下には **INFO** という解説のコーナーがあり，本文の重要表現や使われ方を日本語で解説し，生徒の理解度を深める役割を果たしています。例えば，Lesson 11 の **INFO** の一部は次のようになっています。「block は『４つの街路で囲まれた街区』のことで，Go straight（for）two blocks. は『まっすぐに2区画先へ行ってください』という意味です。Turn right[left]は『右［左］へ曲がってください』という言い方です。」



〈pp.38-39より〉

平成19年度用 開隆堂高校英語教科書・内容のご案内(続)

次に，ダイアログの内容理解を確かめるために聞いて答える形式の **Comprehension**，さらにトピックと関連する内容や発展させた内容を耳で聞いて答える形式の **Listening Practice** が続きます。Lesson 11 では，道順を伝える英語を聞いて，到着する場所を地図から選ぶ練習問題となっています。

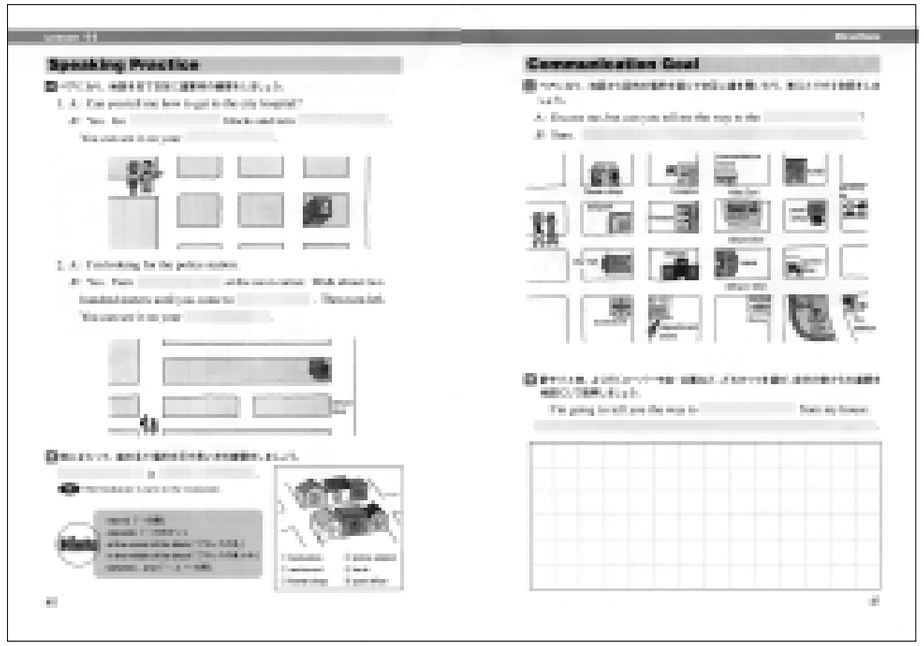
そして，**Speaking Practice** でイラストなどを使い，ある程度型の決まったセリフの一部に語句を当てはめる形で，ペアで会話練習をします。Lesson 11 では，地図を見て交互に道案内の練習を行い，“go straight”“turn right”などの方向を表す表現や，“next to”“opposite”などの位置を表す表現を学びます。

最後の，**Communication Goal** でその Lesson で学んできたことを総合的に練習し，自分の考えをまとめて，グループワークやプレゼンテーションを通じてコミュニケーション能力の向上を目指します。

平成19年度版では，新しく「キーワードをキャッチしよう」「音のつながりや変化に慣れよう」「弱くなる音に慣れよう」などリスニングのための音声上の留意点をわかりやすく，例文が練習できるようにまとめた **Listening Points** のページを設けました。また，京都を代表する名所を英語で聞いたり，実際にガイドになって **Hints** を活用して名所の説明を英語にし，発表する **Welcome to Kyoto!**，魚の英語名についての問答をペアワークで行ったり，ヒントを参考に魚の説明を英語にして発表する **Welcome to Our Aquarium!** のページなどが設けられています。

巻頭には，教室で先生に積極的に質問できるように，**Classroom English** のコーナーを設け，実際に教室で使える表現を挙げています。最初の授業で練習し，頻繁に活用してもらいたいコーナーです。

教師用指導書は現行版同様，日本語と英語による指導書(解説編)のほかに，ALT のための英語のみの指導書も用意し，日本人教師と ALT のスムーズな意思疎通が図れるよう配慮します。



〈pp.40-41より〉

題材一覧（B5判・96ページ）

課	タイトル	内容
1	Introductions & Greetings	亜紀がトムにクラスメートを紹介する。(紹介や挨拶の表現)
2	Asking Permission	トムが亜紀にものを借りる。(許可を求める・感謝の気持ちを表す表現)
3	Suggestions	亜紀がトムに，皆と一緒に水族館に行こうと誘う。(提案を表す表現)
4	Questions	トムが亜紀に質問をする。(相手から知りたい情報を聞き出す質問の表現)
5	Telling Time	放課後，トムが亜紀に時刻を聞く。(時や日付，予定に関する表現)
Listening Points		リスニングのための留意点をまとめ，例文とともに提示したページ。
6	My Daily Schedule	亜紀がトムに1日のスケジュールを聞く。(日常の習慣についての聞き方)
7	Weekend Plans	トムが亜紀に週末の過ごし方について聞く。(週末の予定の聞き方)
8	My Horoscope	トムと亜紀が誕生日や星座について話し合う。(誕生日と星座の聞き方)
9	Hobbies	トムの趣味について亜紀が聞く。(趣味について話す言い方)
10	Fast Food	亜紀とトムがファースト・フード店で注文する。(注文に関する表現)
11	Directions	トムがホテルへの行き方を人に聞く。(目的地への行き方に関する表現)
12	Talking on the Phone	トムが亜紀の家に電話をかけると，亜紀のお母さんが電話に出る。(電話のやりとりや決まり文句の練習，電話による情報伝達のしかた)
13	Volunteer Activities	亜紀とトムがお互いのボランティア活動について話す。(ボランティア活動に関わる表現を学び，自分自身の考えを伝える練習)
14	Taking a Train	トムが代々木上原から地下鉄に乗ろうとして銀座までの行き方を駅員に聞く。(電車の乗り降り，乗り換えの言い方，所要時間の聞き方・答え方)
Welcome to Kyoto!		総合的な言語活動の課。京都の寺社めぐりを行う設定で，英語で金閣寺等の説明を聞き，ヒントを参考に清水寺の説明を英語で作り，発表する。
15	Shopping for Sukiyaki	亜紀とトムがすき焼きの材料を買いにスーパーに行く。(品物の数量の表し方や日本的なものの説明方法)
16	Sports	亜紀がトムに好きなスポーツを聞く。(好きなスポーツの種類や比較)
17	Health Problems	トムの体の具合を亜紀が心配する。(体調を聞いたり，症状を答える表現)
18	My Home	亜紀がトムを自宅に招待し，和室の居間に通す。(接待や案内の表現)
19	Talking about the Future	トムと亜紀が将来なりたいものについて語る。(将来の夢や希望に関する表現)
Welcome to Our Aquarium!		総合的な言語活動の課。水族館内の設定で，英語の音声案内で魚の説明を聞く。これをもとに，グループで魚の説明を英語で作って発表する。
20	At a Sushi Restaurant	亜紀のお父さんが亜紀とトムをすし屋に連れていく。(日本料理店での典型的な説明表現やものの位置の表し方，料理法の表現)
21	A School Outing	亜紀とトムが遠足の予定を確認する。(出発や集合の時刻，天候の表現)
22	E-mail to a Friend	亜紀がトムにパソコンの使い方を聞く。(パソコン関連の表現)

〈19年度新刊 オーラル・コミュニケーションⅠ〉

ORAL COMMUNICATION Revised EXPRESSWAYS I Advanced Edition

〈上級向け〉

明海大学教授　小林 健

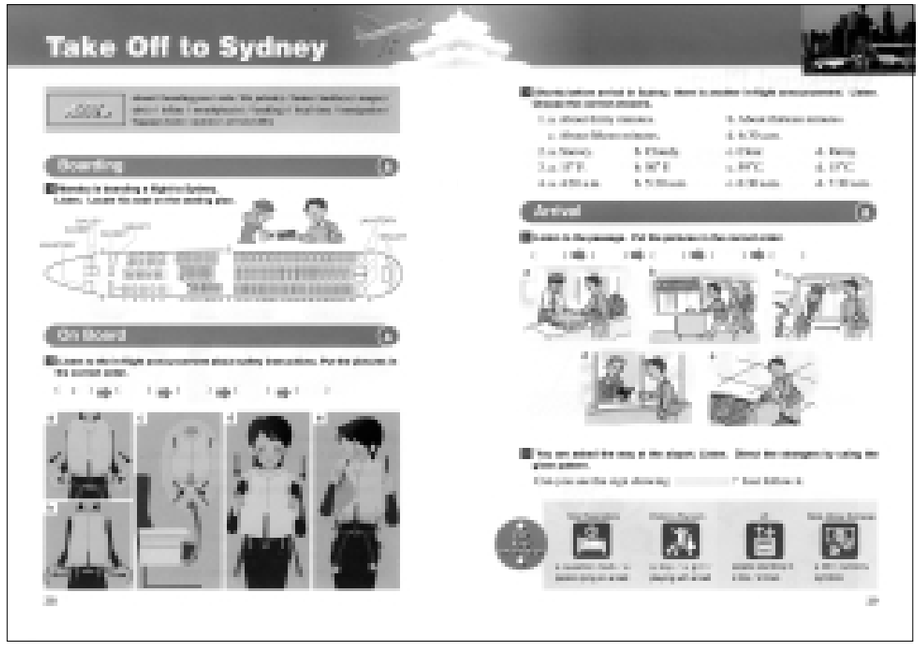
Expressways I Advanced Edition を世に問うてから4年が経過した。この教科書は，もとより中・上級者レベルの学習者の使用を意図して編纂したもので，指示文などを含め全編全て英語で行ったのも，その趣旨に拠った。中学生レベルの言語材料＋αで充分に対応できるよう配慮したが，平易さの追求によって表現的な不自然さが生じないよう細心の注意を払った。

また，舞台設定において教科書の前半を日本に，後半をオーストラリアに置いたのも，この教科書の特徴の一つであった。これについては賛否両論あろうが，今日，高等学校の修学旅行や語学研修旅行の行き先として同国が1位の座に君臨する事実に照らして，極めて自然な成り行きと考える。同時に，この機会に是非とも特定の国の英語に対する日本人特有の偏見や憧憬を払拭してもらいたいという強い思いがあったことも付け加えておきたい。言うまでもなく，英語圏に普遍的な表現にとどめた。

さて，この度，平成19年度用の改訂版を再び送り出す運びとなった。この間，現行版を実際にご使用いただいた先生方から貴重なご意見，ご助言を頂戴した。改訂に当たっては，当然，これらを参考にさせていただいた。この誌面を借りて感謝申し上げる次第である。

以下に今回の改訂で新たに設けたページや工夫を中心に簡単に説明したいと思う。

まず，教科書の前半(舞台は日本)と後半(同オーストラリア)を分ける中ほどに，**Take Off to Sydney** と題して見開き2ページを新設し，転換の節目とした。ここでは後半の主人公Manabuを通じて，空港や機内でのアナウンスメントや会話を聞き取ること，掲示を見て(空港内の)道案内をすることを中心的な活動とした。



〈pp.38-39より〉

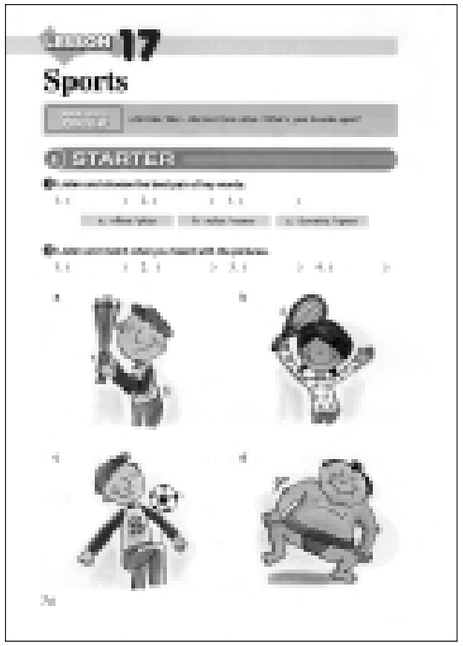
さらに新設ページとしては，3か所に見開き各2ページの **Listening Review** を配置した。ここでは聞き取りに特化し，better listener になるための音声に関する留意事項やヒントを左ページにまとめ，右ページには復習を兼ねた，ある程度の長さの対話や文章を聞いて答える形式の異なる設問を配した。大学入試センター試験の Listening にも充分耐えうる内容と考えるので，適宜，ご利用願いたい。

各Lesson の構成については，現行版では各Lessonを 6 つのセクションに分け，**STARTER**, **DIALOG**, **LISTENIG PRACTICE**, **SPEAKING PRACTICE**, **COMMUNICATION TASK 1**, **COMMUNICATION TASK 2** とし，「聞くこと」から「話すこと」へ段階的にコミュニケーション活動に到達できるよう配慮してある。今回の改訂においても概ねこの流れは踏襲したが，各 Lesson の冒頭，**STARTER** の前に **PHRASAL PREVIEW** を新設した。

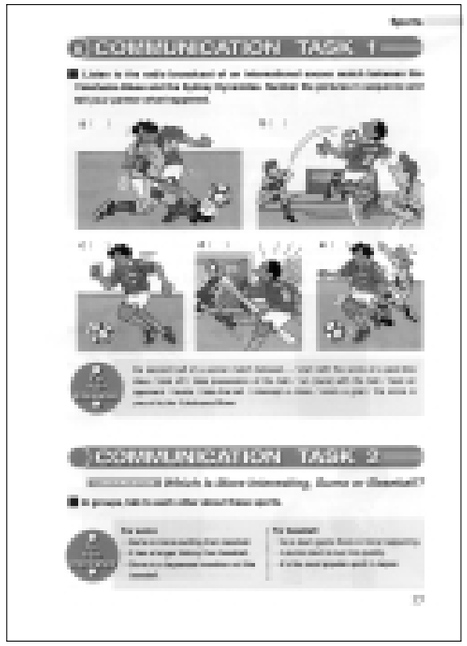
PHRASAL PREVIEW の目的は，その Lesson で扱う主要フレーズ，会話表現を事前に文字で与えることにより学習目標を明確にすることにある。また同時に，印字されていない Listening 材料を聴解する **STARTER** にとってはヒント的な役割も兼ね備える。これによってさらに円滑に **DIALOG** へ進めるものと考える。

なお，目次ページを開いていただくとわかることであるが，各Lessonのタイトルの横に **PRESENTATION** **ROLE-PLAYING** **CONVERSATION** **DRAMA** のいずれかが色分けして記載されている。これは各Lessonの最終言語活動である **COMMUNICATION TASK 2** の活動内容を示すものである。現行版では目次の段階ではこれが示されておらず，当該TASKに至って初めてわかるというものであるため，それを改め活動内容を事前に明確にした。

最後になるが，イラスト類も必要に応じて訂正，追加し，同時にカラーの多様化も積極的に行い，全体的に現行版よりは見やすく，楽しく，明るい雰囲気が作り出せたと思う。



〈p.74より〉



〈p.77より〉

題材一覧（B5判・96ページ）

課	タイトル	内容
1	Commuting to School	中国からの留学生Ling，オーストラリアからの留学生Kate，そして日本人の高校生Takeshiが通学の手段や時間について話し合う。（交通手段や所要時間，行き先の表現）
2	Using the Phone	Kateがホームステイしている鈴木さん宅からオーストラリアの母親へ電話をする。（電話での受け答えの表現）
3	The School Festival	日本の高校の文化祭についてTakeshiとKateが話し合う。（文化祭や日本の伝統的な祭事について説明するための表現）
4	Recycling and the Environment	Kateとホームステイ先の母親がごみの分別について話し合う。（環境問題を話し合うための関連表現など）
5	Driving and Directions	Kateがホームステイ先の両親に連れられて富士山へドライブに出かける。（交通や道案内の関連表現）
6	Using Computers and E-mail	KateとTakeshiがインターネットや電子メールについての話をする。（パソコン・電子メールの関連表現）
7	Doing Volunteer Work	KateとTakeshiがボランティア活動について話し合う。（ボランティア活動の関連表現）
8	Talking about the Weather	Takeshiがオーストラリアへ戻ったKateと電話で天候の話をする。（天気・天候の関連表現）
Listening Review 1		Listeningのための留意事項のまとめとListening Testのページ。
Take Off to Sydney		飛行機の中や空港内を想定したコミュニケーション活動を行う。この課を境に，場面設定が日本からオーストラリアへと転換し，登場人物も変わる。
9	Weekend Plans	オーストラリアへ留学しているManabuはKylieの叔父さんの家でのバーベキューパーティーに招かれる。（予定・意図・提案・勧誘などの表現）
10	Shopping	KylieとManabuがジーンズを買いに出かける。（店での買い物，服のサイズなどに関連する表現）
11	Visiting the Doctor	かぜをひいたManabuが病院へ行く。（いろいろな症状の言い方）
12	Hobbies	Manabuとホームステイ先の母親が趣味について話し合う。（趣味について話し合うための表現）
13	Superstitions	ManabuとKylieが迷信について話し合う。（迷信の背後にある文化の違いや日本の迷信を英語で説明するための表現）
14	Pets	ManabuとKylieがペットについて話し合う。（ペットの長所・短所について意見を述べ合うための表現）
15	Getting Theater Tickets	Kylie が日本の劇団が公演する芝居を見に行こうと Manabu を誘う。（チケット予約の表現，台詞を考え短い劇を実演するための表現）
Listening Review 2		Listeningのための留意事項のまとめとListening Testのページ。
16	Future Plans	ManabuとKylieが自分たちの将来の職業について話し合う。（自分の将来の目標について述べるための表現）
17	Sports	ManabuとKylieがクリケットのフィールドでスポーツについて話し合う。（スポーツについての表現）
18	Housing	Kylieの家を訪れたManabuがその広さに驚く。（家の様子や感想を伝える表現）
19	Preparing for a Speech Contest	Manabuがスピーチコンテストに出場するにあたって，Mr. Pepperにアドバイスをもらう。（スピーチの構成について学び，実際のスピーチに挑戦する）
20	Eating Out	スピーチコンテストで入賞したManabuにKylieはハンバーガーをおごる。（ファースト・フード店での会話表現，料理の名前）
Listening Review 3		Listeningのための留意事項のまとめとListening Testのページ。

日本人学習者とオーラル・コミュニケーション（2）

—Speaking in the Oral Communication Classroom—

明治大学教授　James C. House

Many years ago in Britain a French teacher once told me that students "should not attempt to speak French until they can form perfect sentences." I restrained myself from saying that in that case they will probably never speak French at all! The same is true of all foreign language learning. Right from the beginning students should be encouraged to speak the target language. Even a simple "hello" is a good way to start. This is not to say that we should pretend that speaking a foreign language is easy, far from it. However, students should be encouraged to speak without worrying about any mistakes they might make.

One way of helping students to speak is to listen to what they have to say and then to paraphrase what they have said and thus correct the mistakes they have made. This "echo" method does not draw undue attention to students' mistakes but allows them to hear where they have gone wrong. Sadly, students sometimes do not listen to the teacher's paraphrase but simply "turn off" after speaking; but even in that case other students who are listening can take advantage of the corrections.

Another way of assisting students with speaking is to ask questions. After the student has finished a spoken task the teacher can ask a follow-up question. In this case the student cannot switch off after speaking but must listen to the question and try to form an answer. Questioning is a reflection of what happens in real spoken communication in life. In a very interesting book called "Polite Fictions" the author makes a contrast between Japanese spoken communication, which she likens to a game of bowling, and Western spoken communication, which she likens to tennis. In bowling each team member takes his/her turn whilst the others merely observe. However, in tennis each player has to hit the ball back to the other player to keep the game going. Sometimes students are visibly shocked when I ask them to answer a question after a presentation. They seem to feel that after doing a presentation they have finished their duty and should not be expected to contribute further. Such students have not yet understood what oral communication means. Speaking English is like tennis, not bowling.

When we speak we have to pronounce the language we are using. Pronunciation of a foreign language is often very difficult to master after we become adults. Scientists have shown that the best time to master pronunciation is around the age of 5. Perhaps that is why the Education Ministry in Japan is pushing for elementary school children to learn English. As with all English classes it is important to help students have fun while learning pronunciation. Singing songs or saying rhymes while mimicking the teacher's pronunciation or a recording of a native speaker are orthodox ways of training the ear. One elderly German teacher told his students that they just had to be like parrots and mimic the teacher's German pronunciation. By doing this they would learn German pronunciation easily!

There is truth to this story because the key to learning comprehensible pronunciation in a foreign language is to train your ear. Japan is a writing based culture. Enormous importance is given to the written word. Western society focuses more on the spoken word. One of the contentious descriptions of typical Japanese pronunciation of English is called "Katakana" English. This is a critical reference to the influence of ***katakana*** script on English education in Japan. Whatever each individual's views on ***katakana*** might be, it is a fact that "kana" is a written rendering of Japanese phonemes and does not represent the sounds of the English language. I personally don't think it helps to use ***katakana*** or ***furigana*** in pronunciation teaching. Students should concentrate instead on listening to the target pronunciation and repeating it and then listening to their own pronunciation and comparing it to the original.

Finally, I would like to emphasize that speaking and listening go together and should not be viewed in isolation. As a good friend of mine often says, "Successful language learning involves three things; practice, practice and practice." He speaks several languages fluently, so I think his point is valid. Why not encourage students to form informal speaking groups outside the classroom? They could listen to and watch basic English conversation programs on radio or TV or work on handouts from their English teacher or CDs from their textbook and practice speaking together. It could make a world of difference to their communication skills and their motivation.

References

・Sakamoto, N. & Naotsuka, R.（1982） *Polite Fictions*. Tokyo: Kinseido

・http://www.eigotown.com/eigocollege/etj/etj.shtml　English Teachers in Japan website on *katakana* in English teaching.

英語教師の裏ワザ　音 読 指 導（第1回）

東京都狛江市立狛江第一中学校教諭　北原 延晃

1. はじめに

中学英語の基本は，教科書を正しい音調で適切な速度で音読できることである。これがベースにないと，さまざまな活動に支障をきたす。中学1年終了時には全員がスラスラ読めるように，徹底して指導したい。

2. 音読までの活動

English Express*を使った既習語い・文型の確認（2，3年）

5−10分

▼

Picture cardsを使ったQ&A（1，2年）
Picture cardsを使ったPicture Describing*（3年）

5−10分

▼

oral interaction / introduction

3−5分

▼

語い指導

5−8分

▼

ジェスチャーを使った内容理解（1年）
Q & A，指さしを使った内容理解（2年）
指さしを使った内容理解，速読（3年）

5−10分

▼

音読（chorus, paced, shadowing）*

5分

▼

個人読み（2−5回）

2分

▼

☆読み（25回以上読む）

◆ 宿 題 ◆

3年生は音読の回数を減らし，速読・skimming, scanning中心で授業を組み立てている。

＊語い・文法復習プリント『English Express』（＊Sunshine English Course では教師用指導書セット内『スパイラル学習ワークシート』）

＊Picture Describingについて詳しくはDVD “6-way Street”（BUMBLEBEE&MEDICOM）下巻 Disc 1（2003.7）及びライブ版（2003.8.26筑駒）Disc 3参照

＊ビデオ『スピーキング活動の絶対評価実例シリーズ』（TDKコア・開隆堂）第1巻参照

3. 音読指導

音読の種類（下へ行くほど speaking に近くなる）

① Repeat after T/CD……教師・CD・テープなどモデルの後について読む。

② Paced Reading……モデルと一緒に同じスピード・同じピッチ（音の高低）で読む。

③ Shadowing……モデルを聞きながらすぐに再生する。（開本，閉本）

④ Read and Look up……1文を目で見てから顔をあげてその文を言う。

⑤ Gesture Reading……ジェスチャーをつけて読む。→ 閉本のまま教師のジェスチャーに合わせて文を言う。（NHK「わくわく授業」）

⑥ Pair Reading……ペアで片方が本文を読む（見ないで言う）。もう一方は教科書を見ながら即興で内容を変えて（行間に新たな文を挿入して）いく。→ スピーキングへの橋渡し

＊音読指導の理論編については『英語教師の知恵袋』上巻（1997.3 開隆堂）参照

＊実際の音読指導についてはDVD “6-way Street”（BUMBLEBEE & MEDICOM）上巻（2003.5）Disc 1 参照

英語教師の裏ワザ　英語のつまずきの一つ，3人称単数現在形に対処する

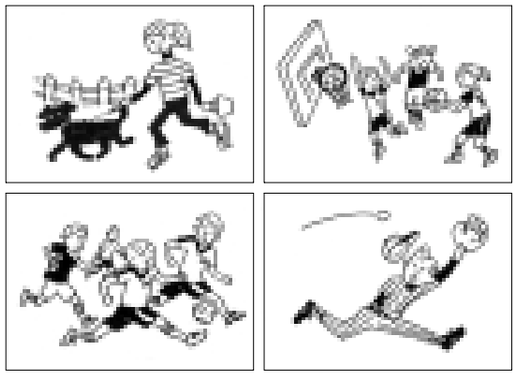
東京都江東区立深川第一中学校教諭　原田 博子

近頃では，小学校で英語活動が行われており，中学校入学以前に英語経験のある生徒がほとんどである。なかには，すでに英語に対する興味を失いかけて中学校に入学してくる生徒も見受けられるようになってきた。ここでは，中学校に入学して初めて英語に出会う生徒が，大好きだった英語に対して興味・関心を失い始める原因の一つと考えられている3人称単数現在形の指導について考えていきたい。

中学1年生のほとんどの教科書は，be 動詞から入り，一般動詞の指導へと進む。be 動詞中心に授業が行われる時期から，一般動詞の3人称単数形導入以前までは，生徒は英語に不安を感じることなく，言語活動を楽しむことができている。ところが，3人称単数形が導入される頃から，徐々に英語に対するつまずきが見られるようになる。

“I like soccer.” が “He likes soccer.” になり “Do you like soccer?” が “Does he like soccer?” と表さなければならない3人称単数の概念は生徒にとって壁となり，英語は難しいと感じ始める。しかし，要は I と you は例外として，3人称単数の he，she と3人称複数の they が区別できれば，3人称単数形の理解は難しいことではない。

そこで，3人称単数形を導入した後，定着のためのドリルとして下に示したような he，she と they を区別する絵をたくさん用意して，“She has a dog.” “They play basketball.” などの文を口頭練習やペアワークで練習させながら，3人称単数形について理解させることができる。



もう一つ大事なことは，定着には繰り返しが欠かせないということである。3人称単数形に限らず，導入した言語材料を生徒はすぐ使えるようにならなければならないと考えていないだろうか。3人称単数形は，後になってもなかなか定着しない文法項目で，生徒は知識でわかっていても，実際言わせたり書かせたりすると，定着していないことがわかる。特に定着に時間がかかる文法項目は，生徒に使わせる機会を意図的に作る必要がある。

では，実際にどのような場面で3人称単数形を使わせることができるであろうか。

（1）授業開始あいさつ後のsmall talkで：

T: Do you like sports, S1?
S1: Yes, I do.
T: What sports do you like?
S1: I like soccer. I play soccer too.
T: Oh, great. Does S1 play sports, S2?
S2: Yes, he does.
T: What sports does he play, S3?
S3: He play soccer.
T: Please say it again.
S3: He plays soccer.

（2）Show and tell の家族紹介と発表後のリスナーからの質問を通して：

Speaker: This is my brother. His name is Jiro. He likes music.... Thank you for listening.
Listener: What kind of music does he like?
Speaker: He likes J-pop.

（3）Reportingをするとき：チャットやインタビュー活動などで，相手から得た情報をクラスに伝えたり，書かせたりするときに，伝える内容によっては3人称単数形を使う機会を与えられる。

例：I talked to A-*san*. She likes reading books.

授業の打ち合せの際に，ALTでさえ-sを落として，本人が苦笑いしていたことを思い出す。いずれにしても，一度導入して終わりではなく，その後，どこでどのように使わせる機会を作るかが，知識としての英語を使える英語に変えていくカギとなる。

投 稿

連携型中高一貫校における朝学習の取り組み

― 鵡川中学校・鵡川高等学校の実践報告 ―

前北海道岩見沢緑陵高等学校専任講師　**中村 洋**

平成15年度より，鵡川町立鵡川中学校と北海道鵡川高等学校との連携型中高一貫教育が始まった。設置者の異なる中学，高校における一貫教育は平成11年4月に制度化され，北海道では平成14年度に開始された上川町立上川中学校と北海道上川高等学校が最初の実施校となった。平成15年度は鵡川，上ノ国，鹿追の3地区でも新たに中高一貫教育が開始され，以後も実施校が増える予定となっている。

各地区とも，地域の実状をふまえた特色ある教育課程が編成されている。鵡川地区（筆者の前任校である鵡川中学校・鵡川高等学校）の例では，中高合同での総合学習や，各種行事における吹奏楽曲の合同演奏などが行われているが，これらに加え，教科指導でも以下のような取り組みが行われている。

・中学校のBL（Basic Learning）における高等学校教員による自学自習支援
・中学校の選択教科と高等学校の「自由講座」における相互乗り入れ授業の実施（※1）
・継続的なTTや出前授業などさまざまな形態の授業における連携

本稿では，これらの中からBLと呼ばれる朝学習の取り組みを報告する。BLは英語と数学の２教科で行われ，基礎基本の定着と，そこから生まれる発展的な学習を主体的に実践させることを目的とし，毎週水曜日に英語，金曜日に数学の授業が，朝のSHR（Short Home Room）と１時限の間に設けられた「０時限」に25分間行われている。BL英語では，生徒はクラス単位で授業を受け（※2），中学校教員は各クラスの担任，副担任を中心として全員参加，高校教員も各自の専門教科にとらわれることなく１時限の授業がない者を中心に参加している。

毎時の教材は，既習事項の復習を目的として中学校側が作成している。Ｂ５判で表面は基本文の提示とそれを用いた対話文，裏面はその表現を確認するための英作文問題となっている。25分間の流れは，最初にホームルーム担任がその日の目標を簡単に解説する。副担任と協力して対話のモデルを示す教員もいる。その後10分間ほどの生徒同士の対話練習の後，残りの10分ほどで各自が英作文問題でまとめを行う，というのが一連の流れとなっている。

対話練習は最低10人と行うように，サイン欄が設けられている。生徒たちはサインをたくさん集めるべく，ゲーム感覚で積極的に対話練習を行っている。廊下に出て隣のクラスの生徒と対話練習をする生徒も少なくない。おとなしい性格の生徒や，英語に苦手意識を持つ生徒は消極的になりがちだが，我々教員たちから話しかけ，みな同様に対話練習が行えるように配慮している。復習の英作文も生徒たちが相談し合い，教え合いながら問題を解いている。教員たちはヒントを与えたり，スペルミスを確認したりしながら机間巡視を行っている。英語科教員以外への配慮として，教員用の問題用紙には模範解答が示されている。

生徒からの反応が良いように思われるこのBLのシステムであるが，BLが始まって半年が経過した時点で生徒，教員を対象にとったアンケート調査の結果にも数字としてそれが表れた（表１，２参照）。また具体的なコメントも多数寄せられている。一部を紹介すると，「会話をするなかで学べるのでとても良い」（中２），「友だちと会話したり英語で遊ぶのが楽しい」（中１）という肯定的な意見が多かった。もちろんなかには，「書いたり読んだりあまりできない」（中２），「発音するだけで英語を書かないのであまり役に立っていないと思う」（中１）といったBLの形態に対する不満や，「毎回やることがワンパターンでつまらない」（中３）といった手厳しい意見も見受けられた。受験が近い中３の生徒の中には，「（今のような形式ではなく）もっと復習のためになること」や「テスト対策」をやりたいという意見もあった。また，高校の教員が授業に参加することに対しても，「高校の先生が来ると転入生が来るみたいでわくわくする」（中１），「違う先生とも会話ができる」（中３）といった好意的な意見が多かった。

これに対し，教員側の意見はさまざまであった。「生徒は楽しんで取り組んでいるように思う。『ゆとり』のためにもいいかな？」（中学），「当初のコミュニケーション英語というねらいがおさえられていてよい」（中学），「コミュニケーション能力は非常に向上しているように思います」（中学）とBLの制度自体には賛同しつつも，英語科以外の教員も参加することに対しては，「英語科の教員が担当することで，今よりも発展的な内容もできると思います」（中学），「発音など，専門的なことを教えられなくて申し訳ない」（高校），「中学レベルであれば『専門外』は理由にならない」（高校）といった意見も見受けられ，個々の教員の「戸惑い」や，BLの制度に対する教員間に「温度差」があるのも事実のようだ。今回取り上げられたBLに限らず，中高一貫教育実施初年度のため多くの場面で試行錯誤が続いているが，「６年間かけて生徒を育てる」という目標に向けて，行事や教科での取り組みを通じ，教員間の相互理解を図っていくのが先決であろう。

今回取り上げたBLのシステムは，なにも中高一貫教育の実施校だけのものではない。各校の実状に照らし合わせ，応用，工夫していくことで，多くの学校で取り入れることが可能であろう。英語の朝学習というと，基本的な文法問題や単語テストなどが多くなりがちであるが，対話練習を中心とした鵡川中学校・鵡川高等学校での取り組みは，「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」に一応の効果をあげていると言っても過言はなかろう。

※本稿は，2003年10月25日に藤女子大学で行われた北海道英語教育学会第4回研究大会での発表に2004年１月，加筆・修正したものである。

（注）

※１　英語関係の自由講座では「英検対策」の授業を毎週行っている。

※２　BL数学は習熟度別クラスで行われている。

BL英語に関するアンケート

表１「BL英語は楽しいですか？」

	1年	2年	3年	合計
楽しい	14	9	7	30
まあまあ楽しい	35	33	35	103
あまり楽しくはない	20	24	35	79

表２「BL英語はわかりやすいですか？」

	1年	2年	3年	合計
わかりやすい	15	16	22	53
まあまあわかりやすい	44	42	45	131
わかりやすくない	10	8	10	28

第54回 中村英語教育賞入選論文発表

第１位：Examining the Effectiveness of “Recast” for Japanese High School Students

北海道函館東高等学校　佐藤 臨太郎

第２位：The Effect of Pre-Writing Tasks on Writing of Japanese High School EFL Learners

大分県大分上野丘高等学校　麻生 雄治

第３位：該当者なし

◆ 審　査　員 ◆

佐 野 正 之(審査委員長・横浜国立大学名誉教授)

和 田　稔（同副委員長・明海大学教授）

石 井 丈 夫(京都産業大学名誉教授)

松 本 青 也(愛知淑徳大学教授)

山岡俊比古(兵庫教育大学教授)

論文審査にあたって　審査委員長　佐野 正之

今回で実に54回を数える，全国的に知名度の高い伝統ある「中村英語教育賞」に，合わせて４件の労作が寄せられ，審査員一同非常に嬉しく審査にあたることができましたことをご報告し，厚くお礼申し上げます。

自由題を含めて４種類の課題に対して，高等学校教諭４名のご応募をいただきました。どの論文も力作揃いで，審査は難航いたしましたが，最終的には，上位２点を選出することができました。

審査にあたりましては，５名の審査員が慎重に審査し，その結果を踏まえて総合的な観点から委員長と副委員長との間で最終審査を行いました。その結果，上記２点の入選作を決定いたしました。審査基準につきましては，従来からの５つの観点，独創性・発想力，内容の充実度，構成力，表現力，応用性・実用性から審査を行いました。

入選作の論文紹介・講評などについては次号に掲載いたします。ご期待ください。

書評

『ポライトネスと英語教育 言語使用における対人関係の機能』

堀素子 津田早苗 大塚容子 村田泰美 重光由加 大谷麻美 村田和代／著

この国の学校英語教育の「非能率」を矯めるには，ひたすら技能(skill)の訓練に徹すること，と言われ始めたのは，20世紀も80年代に入る頃からであった。

英語教師を大工にみたてて,「カンナひとつ満足にかけられないくせに，いっぱし住宅論をぶつような大工に，世間は用はないのである」という高名な英文学者の英語教師論は，多くの人々の共感を呼んだ。英語の教育を「教養のためだの，文化吸収のためだのと考えるとすれば，これはヘソの方で茶をわかすはず。およそ教養，文化などというものとは無縁のはずである」という元日本英文学会会長の「実用英語」教育論も，世間ではおおむね好意的に受け取られた。

2003年に文部科学省が発表した「英語が使える日本人」の育成のための行動計画は，こんな風潮を，さらに助長する結果になった。特に英語コミュニケーション能力の育成のためと称して，数学など可能な教科から，英語で教えることが奨励されるようになった。小学校から高校まで，国語と社会以外は，すべて英語で教える自治体まで現れ，これを構造改革特区の成果として，小泉首相は2005年１月の施政方針演説で取り上げたほどである。

今回，科学研究費によって公刊された堀素子教授グループの本書は，日・英語のコミュニケーションの達成のためには，個別文化の反映としてのポライトネスが，いかに大きな役割を果たすかを明らかにした実証的研究である。当然，この研究成果は，異文化としての外国語の教育よりも，とかくカンナ掛けの技術指導に偏りがちな近年のわが国の英語教育のありようにとって，鋭い頂門の一針となった。

ポライトネスを，単なる丁寧さや礼儀正しさなどでなく，聞き手に対する話し手の配慮のすべてを含む広い概念ととらえれば，そんな配慮のあり方そのものが，当然，文化によって大きく異なるはずのものである。ところが，有効なコミュニケーションには不可欠なはずのそんな視点が，コミュニケーション能力の育成を一枚看板とする近年のわが国の英語教育に著しく欠落しているという重大な事実を，本書はいちいち具体的に示してくれる。

本書は4部から成る。第1部では，対人関係の認識の仕方が文化によって異なる実態を，日本人の英語接触と外国人の日本語接触の事例から明らかにする。相互の思わぬ誤解や感情的摩擦の調査結果は興味深い。

第2部の西欧語圏と非西欧語圏の英語教科書の比較調査では，両言語圏の人間関係に対する配慮の差の大きさに教えられる。

特に日本の英語教師にとって考えさせられることが多いのが，日本の英語教育とポライトネスを論じた第3部である。なかでも，あれほど強調されるオーラル・コミュニケーションでありながら，肝心のその教科書には，効果的なコミュニケーションを図るために不可欠なはずのポライトネスへの配慮が極めて希薄であるという報告は重要である。さらに，日本文化に通じない英語母語話者には，彼ら自身のポライトネスの方策さえも日本人学習者に指導することは困難であるという指摘も，ALTの役割を考える際には忘れてならないことであろう。

第4部の日本の英語教育への提言は，先ず，教育行政官と英語教科書著作者に，ぜひ一読をすすめたい。

「英語コミュニケーション能力の育成」のためには,「およそ文化などというものとは無縁のはずである」などと考えるとすれば，それこそ,「ヘソの方で茶をわかすはず」であることが，いまや十分に納得されるはずである。

（大阪大学名誉教授　大谷 泰照）

[A５判・304頁　定価6,510円(本体6,200円)
発行：ひつじ書房]

Appleは林檎(リンゴ)に非ず！

近年，語彙習得の研究が盛んである。コミュニケーション活動における語彙の重要性は言うまでもないので，この動向は好ましい。そこでは習得すべき語彙のサイズと深さをめぐる議論が中心であるが，最近，陳腐な語彙でも少し調べてみると，意外な来歴があることに気づき，あらためて語彙やコトバの奥深さを痛感することがあった。

私は数年前から土佐出身の世界的植物学者・牧野富太郎と英和辞書の関係について調査をしている。彼は，実(植物)と名との対応関係を明らかにすること，それをライフワークとし，ときには英和辞書の訳語にも鋭い視線を注いでいたのである。そして，英和辞書には誤訳が多い，と常々嘆いていた。その一例が Apple の訳語である。「Apple は林檎(リンゴ)に非ず，苹果(オホリンゴ・セイヨウリンゴ)とせねばならぬ」と牧野富太郎は主張していた。

そこで，かなり古い辞書から最近の辞書に少しあたってみた。いわずもがな，多くの辞書では「リンゴ・林檎」となっている。が，確かに「苹果」と訳している辞書も数冊あった。明治20年代から昭和初期にかけて出版された辞書である。そう言えば，と思い出したのが宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』である。「苹果の匂いがする」などと，「苹果」は何度もこの作品中に登場する。宮沢賢治はちょうどこの時期を生きた童話作家である。Appleと「林檎」と「苹果」はいったいどういう関係なのだろうか。

ことの真相を究明すべく，リンゴの起源と伝播，そして「林檎」と「苹果」の来歴について少し詳しく調べてみた。まず，中央アジアの高原地域に原生する大果小果2様のリンゴが民族の移動にともなって東西へと伝播した。今から2千年以上も前のことである。小果は中国を経てその漢名「林檎」とともに平安時代末期に日本に渡来したと言われている。あまり日持ちせず，しかも酸味が強く生食にはあまり適さなかった。一方，大果は欧州に伝わり，改良されながら英国，米国を経て，日本には，明治初期に本格的に持ちこまれた。これが Apple である。香りも甘みも申し分がなく「こんな美味しいものはない」と好評を博したという。

そこで，林檎と Apple を区別するため，博物学者・政府官吏の田中芳男が「苹果」という漢字を使ったと言われている。その後，しばらくはこの「苹果」が使われていたが，どうもこの漢字は Apple をイメージしにくい，Apple の売れ行きにも影響を及ぼしかねないという理由から「林檎」がまた次第に使われるようになった。そうして現在のように「Apple の訳語はリンゴ，漢字で書けば林檎」と定着したのは昭和20年代中期のことである。もちろん，牧野富太郎の主張のように，現在においてもなお正確に言えば，Apple は「苹果(オホリンゴなど)」とすべきなのだろうが。

一方，Apple は中国にも伝わり，同様に小果の林檎にかわって広く出回るようになった。それにともない「林檎」という漢字も次第に使われなくなり，現在では，驚くべきことに，田中芳男が使用した「苹果(ピンゴウ)」が中国では Apple の訳語として定着している。

このように，出所では，ほとんど使われなくなった名(訳語あるいは漢字名)が，渡来先では今も脈々と生き続けているのは大変興味深い。小学校の英語授業でもよく取り上げられる至極「あたりまえ」の語彙や訳語も，このように実との対応関係を詳しく調べてみると，意外に複雑な様相を呈していることがおわかりいただけただろうか。たかが Apple，されど Apple である。学ぶ側も教える側も，このようなコトバのおもしろさを少しでも認識すればコミュニケーション活動も随分と深みが出てくるのではないだろうか。

(高知大学教授　村端 五郎)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起，実践報告，研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが，本誌は今後，9月(第54回中村英語教育賞入選論文発表)，2007年1月，3月，5月にそれぞれ発行の予定ですので，原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

① 22字詰×72行以内(本文分量)
② 二重投稿はご遠慮ください。
③ 採用分には薄謝を進呈いたします。